

基礎看護学実習のカンファレンスにラベルワークを活用した

効果と課題

ーカンファレンスの充実度からの分析ー

古田 桂子 (岐阜協立大学看護学部)
馬場 貞子 (岐阜協立大学看護学部)
野網 淳子 (大垣女子短期大学看護学科)

キーワード：基礎看護学，実習カンファレンス，ラベルワーク，教育効果

1. はじめに

「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」(文部科学省，平成 29 年 10 月)のなかで、『臨地実習は看護の知識・技術を統合し，実践へ適用する能力を育成する教育方法の一つである。看護系人材として求められる基本的な資質と能力を常に意識しながら多様な場，多様な人が対象となる実習に臨む。その中で知識・技術の統合を図り，看護の受け手との関係形成やチーム医療において必要な対人関係能力や倫理観を養うとともに，看護専門職としての自己の在り方を省察する能力を身に付ける』¹⁾と述べられている。臨地実習は数人のグループ単位で行われるが，実習の場では出会う様々な患者や様々な看護の体験について，カンファレンスという場を活用してその意味や解決策をグループで考え導いていく。その過程は，学生が自分の意見を伝えあいそれを集約して結論に至らせるため，まさに協同学習の場であるといえる。

しかし，実際の臨地の場で学生が展開するカンファレンスでは，活発な意見は少なく看護の知識や技術を統合するためにグループ内で議論を深める前に教員や臨地実習指導者(以後，指導者とする)に答えを求める場面がしばしば見られる。

実習カンファレンス(以下，カンファレンスとする)に関連した研究は多く，それは効果的なカンファレンスの実施が容易でないことを示している。学生はカンファレンスに対する苦手意識があり，意見を自由，活発に述べることやカンファレンスの進行への戸惑いが強いと言われている^{2) 3) 4)}。また，効果的なカンファレンスの実現を阻む要因として，準備不足や自由に話せる環境^{5) 6)}，緊張や不安⁷⁾が明らかになっている。しかし，学生の戸惑いや不安を軽減させることを目的としたカンファレンスの方法に関する研究は少ない。

そこで我々は，カンファレンスの準備性と討議を促進させるためにラベルワークという手法に注目した。ラベルワークは参画理論の権威である林が開発した参画型教育のツール⁸⁾で，個々の意見をラベルに書き，

それをもとに話し合い、グループとしての見解を図解にして示す(図1)。この方法は汎用性が高く、初等教育から生涯学習まで幅広く活用される簡便な方法であるため学生にも受け入れやすいと考えた。

本研究では、看護基礎教育の中で初めての臨地実習において、ラベルワークを用いたカンファレンスの効果を学生の充実度から分析し、今後の課題を考察したので、ここに報告する。

2. 目的

基礎看護学実習でラベルワークを活用したカンファレンスの効果について、学生の参加姿勢や得られた成果および実施する環境や雰囲気に対する充実度に焦点をあてて分析し、その効果と課題について明らかにする。

3. 方法

3.1 用語の定義

- ・「充実感」とは、有意義と感じたり、満足感や達成感があること。
- ・「充実度」とは、充実度の度合いを示すもの。

3.2 研究対象

A短期大学看護学科1年生で、基礎看護学実習(1単位45時間)を行った学生79名を対象とした。

3.3 期間

2019年2月1日～2019年3月31日

3.4 ラベルワークを用いたカンファレンスの進め方

1) ラベルワークの事前体験

対象である学生たちは、ラベルワークを活用することが初めてであったため、実習前の学内オリエンテーションで、「実習の心構え」をテーマにラベルワークを実施した。実施に際して、進め方の概要を説明し、学生には進め方ガイドを配布した。進行は、教員が担当した。

2) ラベルワークを用いたカンファレンスの方法

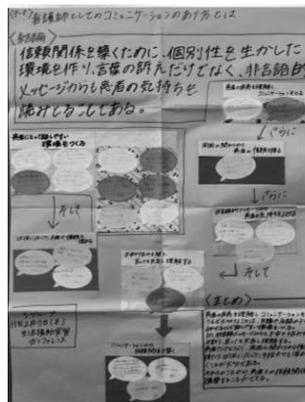
(1) 実施日とテーマ

ラベルワークを使ったカンファレンスは、4日間の臨地実習のうち、3日目と4日目に行った。テーマは、3日目には「看護師としてのコミュニケーションのあり方とは」、4日目は「患者のニーズに合わせた援助を行うために必要なこと」とした。

(2) カンファレンスの進めかた

ラベルワークの方法は、林の提唱した「ラベル図考基本型」⁹⁾を用いた。ただし、実施時間などの制約

図1 学生が作成した図解



条件を考えて、基本型を一部改編，省略して実施した。実施方法は表 1 に示す。

事前準備として，テーマについて各自が自分の意見をまとめラベル（付箋）に記入してくることを課題とした。ラベルワークでは，1 ラベルに 1 つのことを記入するというルールであるため，学生は自分の意見を 2～3 枚のラベルに整理し，記入した。一人 2～3 枚としたのは，扱うラベルの数が 15～25 枚が標準⁹⁾とされているからである。

臨地では，事前に記入してきた「もとラベル」を各自が読み上げ，類似した意見を「取り皿」に載せ（ラベル合わせ）をすることからスタートした。実施時間は，ラベル合わせから図解完成まで約 1 時間とした。その後，作成した図解を使って，テーマに対する学生の意見とそこからどのように結論に至ったかを説明し，質疑応答，教員や指導者の講評を経て終了とした。

表 1 ラベルワークを使った実習カンファレンスの進め方

場所	進め方	具体的な実施方法	所要時間の目安 (分)
自宅	1 「もとラベル」を書く	・カンファレンステーマに対する自分の考えを 1 枚のラベル（付箋）に 1 つの意見を 1 文で書いてくる ・一人 2～3 枚記入する	個人差あり
	2 ラベル合わせをして「取り皿」に載せる	・ラベルに書かれた自分の意見を読み上げ，同じような意見を取り皿（色紙）に載せてまとめる	20
病棟	3 「取り皿」に「看板」を書く	・色紙にのせられたラベルの主張（内容）を一文でまとめ看板を書く	15
	4 空間配置・関係線をつける	・「取り皿」間の関係性を矢印と接続詞を使って示す	10
	5 結論をまとめる	・全体を俯瞰してテーマに対する答えを一文で示す	10
	6 まとめ・発表の準備	・図解の説明文の作成と発表できるよう準備する	5
	7 発表	・作成した図解を教員や指導者へ説明する ・質疑応答し，教員・指導者の講評をうける	15

3) カンファレンスの運営方法

(1) 学生の役割分担

カンファレンスの運営に際して，学生たちの中から司会進行，タイムキーパー，発表者の役割分担を事前に決めて実施した。

(2) カンファレンスへの教員・指導者の参加ルール

カンファレンスの開始から終了まで，教員が必ず参加とした。教員の関わり方については，進行上のアドバイスやタイムキーパーの補佐を行い，ラベルワークのプロセスにおいては教員の意見や指導を加えることはせず，見守りとした。

指導者は，発表への参加は必須とし，ラベルワークの実施に対してもできる限り参加を求め，教員と同様ラベルワークを実施している間は，特に意見を挿まないようにした。

3.5 調査方法

1) 調査日

臨地実習の終了後，学内の実習のまとめを実施した後に行った。実施は 2019 年 2 月である。

2) 調査方法

無記名自記式質問紙を用いて実施した。回収は教室内に回収ボックスを設置し、3日後に回収した。

3) 調査内容

調査内容は主に2つである。1つは、ラベルワークを使ったカンファレンスの「成果」11項目、「参加姿勢」12項目、「環境・雰囲気」10項目に対する学生の充実度である。この項目は、野原¹⁰⁾、高橋¹¹⁾、井上¹²⁾らの研究を元に研究者が自記式の調査票を作成した。2つ目は、このカンファレンスにおける学生の戸惑いである。これは自由記載とした。

4) 分析方法

充実度については、4段階（非常にあった4、ややあった3、あまりなかった2、全くなかった1）とし、各項目を単純集計し平均値と標準偏差、および各段階の比率を求めた。集計には統計ソフトSPSSVer.25を使用した。戸惑いに関する自由記載については、記入された内容の意味を変えないように要約してコード化し、サブカテゴリー、カテゴリーを形成していった。コード化やカテゴリー形成の過程では研究者間の意見が一致するまで繰り返し検討した。

4. 倫理的配慮

本研究は研究者所属の倫理審査委員会に承認（30・12）を得て実施した。研究対象への説明は、実習前の学内オリエンテーションが終了した後に該当する学生へ一斉に実施した。説明項目は、調査は無記名で実施し、研究への参加は自由意志であり参加の有無によって成績には一切関係がなく学生に不利益がないこと、研究以外にデータは使用しないこと、研究成果は学会等で発表すること等である。それらを口頭と文書で説明し、同意書の提出および調査紙の提出をもって同意を確認した。

5. 結果

5.1 回収率

対象者78名に調査を実施しアンケートは77名の提出があり、回収率は97%であった。

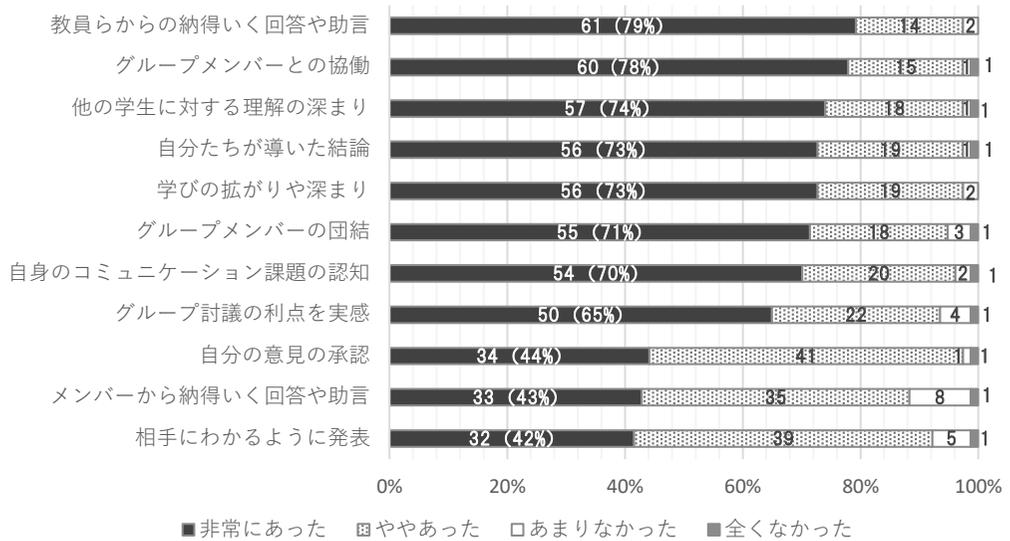
5.2 カンファレンスの充実度

成果、参加態度、環境・雰囲気の充実度は、「非常にあった」「ややあった」を合わせるとすべて80%以上と高い充実度を示した。

成果における充実度は、平均値は3.6 (SD±0.45) で、「非常にあった」割合が最も多かった項目は『教員からの納得いく回答や助言』79%で、以下『グループメンバーとの協働』『他の学生に対する理解の深まり』『自分たちが導いた結論』『学びの広がりや深まり』『グループメンバーの団結』などであった。また「非常にあった」の割合が最も少なかった項目は、『相手にわかるように発表する』であった (図2)。

図2 成果の充実度の割合

n = 77 (人)



参加姿勢における充実度は、平均値 3.6 (SD±0.45) で、「非常にあった」割合が最も高かったのは『メンバーと協力する』83%で、以下『違う意見を受け入れ認める』『相手の意見に関心をもって聴く』『テーマを理解して臨む』『事前に意見を準備する』『自分の役割を果たす』『学生主導で進行する』であった (図3)。

環境・雰囲気においては、平均値 3.4 (SD±0.59) で、最も多かった項目は『十分意見を聴いてもらえた』と『教員らに考えを承認される』で69%であった (図4)。

図3 参加姿勢の充実度の割合

n = 77 (人)

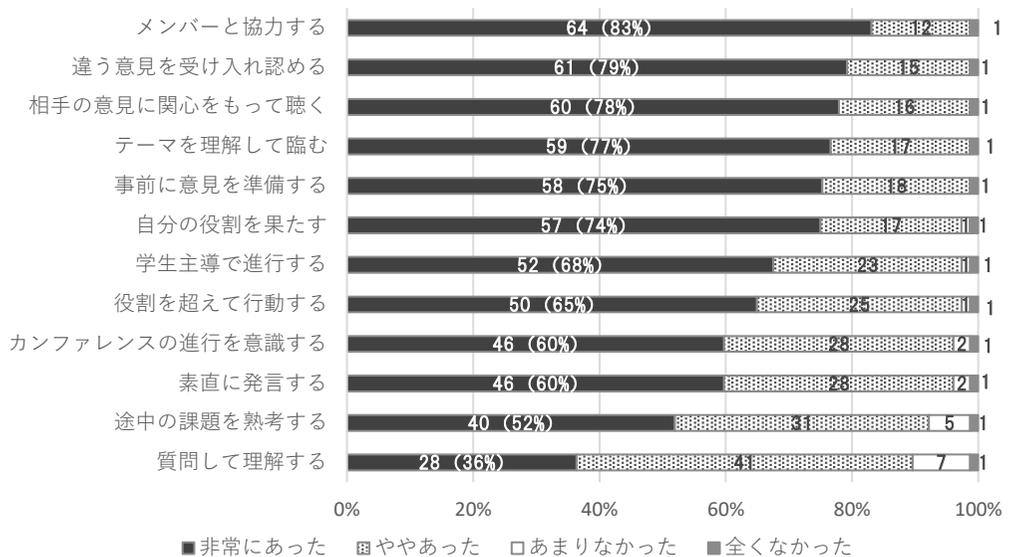
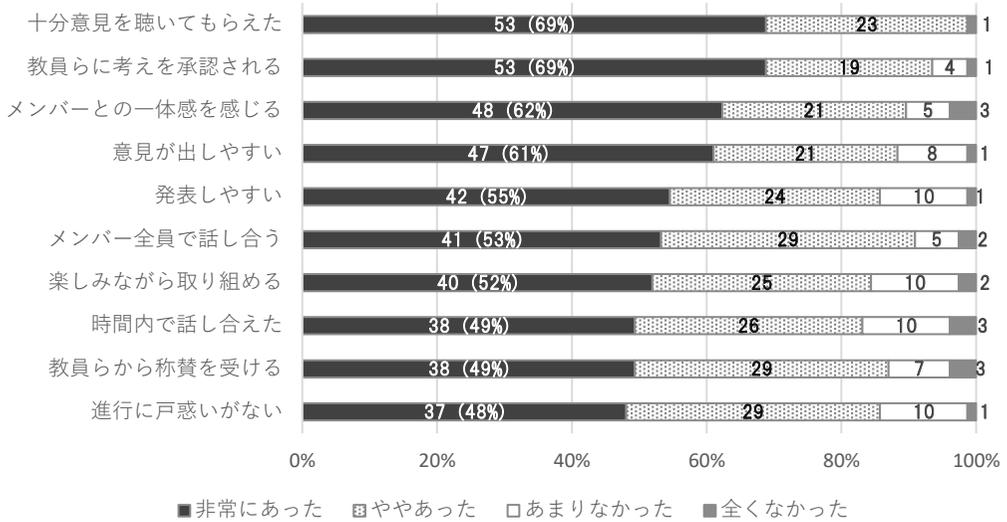


図4 環境・雰囲気の充実度の割合

n = 77 (人)



5.3 実施における学生の戸惑い

ラベルワークを活用したカンファレンスを初めて実施した学生の戸惑いについての自由記載を分析し、カテゴリー化した。文中では、カテゴリーを《 》、サブカテゴリーを〈 〉で記述する。

表2 ラベルワークを用いたカンファレンスでの学生の戸惑い

() はコード数

カテゴリー	サブカテゴリー
時間管理の難しさ	時間の不足 (8)
	時間配分の難しさ (6)
	発表の準備時間の不足 (1)
ラベルあわせと看板つけ	意見の理解 (2)
	意見の分類 (2)
	看板つけ (3)
	意見の集約 (3)
参加態度に問題がある学生への対応	意見を表出しない学生への対応 (4)
	自己主張の強い学生への対応 (1)
自分の意見をラベルに表現する難しさ	自分の意見を規定内で表現すること (3)
	テーマに対する意見を複数考えること (1)
自分の意見に対する不安	自分の意見に自信が持てない (1)
	同様な意見がないことへの不安 (1)
わかりやすい図解の表現	カテゴリー間の関係性を示すこと (1)
	結論のまとめ (1)
わかりやすい発表のしかた	話し合いの結果をうまく発表すること (1)

戸惑いについての自由記載より抽出された39コードは、16のサブカテゴリーと、7つのカテゴリーが抽出された。《時間管理の難しさ》が最も多くのコード数15を持ち、それは〈時間の不足〉〈時間配分の難しさ〉〈発表の準備時間の不足〉のサブカテゴリーから構成された。次いで多かったものは《ラベル合わせと看板つけ》でコード数は10、〈意見の理解〉〈意見の分類〉〈看板つけ〉などから抽出された。《参加態度に問題がある学生への対応》は、〈意見を表出しない学生への対応〉〈自己主張の強い学生への対応〉から構成された。その他、《自分の

意見をラベルに表現する難しさ》《自分の意見に対する不安》《わかりやすい図解の表現》《わかりやすい発表のしかた》が抽出された（表 2）。

6. 考察

6.1 ラベルワークを活用したカンファレンスの効果

ラベルワークを使ったカンファレンスは成果、参加姿勢および実施した環境・雰囲気が高い充実度を示した。

参加姿勢の充実度では、『テーマを理解した上で臨む』『事前に意見を準備する』『相手の意見に関心をもって聞くこと』『違う意見を受け入れ認める』が高かった。また、環境・雰囲気として『十分意見を聴いてもらえた』ことに充実感を感じていた。これらが高かったのは、あらかじめ自分の意見をラベルに記す課題が、テーマに対する自分の考えを熟考する機会となり、カンファレンスへの準備性を高めることにつながったと考えられる。また、ラベルワークは「一枚一枚のラベルを人格ある人間と考えてその声に耳を傾けるつもりで行う」¹³⁾ ため、ラベルに書いたことを元に正しく伝えようとするのと、それを理解しようとする姿勢が『十分意見を聴いてもらえた』という満足感につながったと考えられる。

成果の充実度では、『学びの拡がりや深まり』や『自分たちの導いた結論』が高かった。学生は自分たち主導で意見交流や図解作成をすること、自ら思考を発展させて、導いた結論に価値を見出すことができた。ラベルワークの手法を活用することにより、主体的な学びが学生の充実感を高めたと考えられる。また、この過程において教員は学生の意見を否定せず見守ったこと、学生の討議プロセスや導き出された結論を承認したことが、学生の学びの充実感につながったと考える。

参加姿勢での充実度は、『メンバーと協力する』『自分の役割を果たす』『学生主導で進行する』『役割を超えて行動する』が高かった。図解を作成している学生たちの様子を図 5 に示すが、後半は、身を乗り出して考えを述べるなどの意見交換をしていた。その様子からも学生の主体的な取り組み姿勢がうかがえた。

また、成果の充実度では『グループメンバーとの協働』が高く、グループ内の協力体制に成果が見られた。西村¹³⁾の報告でも、「グループ間の結束」が示されている。これは、1 時間という時間制限のある中で意見交流し図解作成を経て結論まで導くという課題を達成するために、学生たちが自分の役割を果たし、また補完しあったことが要因と考えられた。グループ内の協力体制によって、カンファレンスにおける司会進行はストレスが高いといわれているが、メンバーが協力し合うことで司会の負担は軽減されたと考えられる。

安永らは、協同学習について、「共同して学びあうことで学ぶ内容の理解・習得を目指すとともに、協同の意義に気づき、協同の技能を磨き、協同の価値を学ぶことが意図される教育活動」¹⁵⁾ と述べている。今回実施したラベルワークを用いたカンファレンスは、学生がテーマについて個々が意見をもって課題解決のため協力して取り組み、その過程で効果的に意見を交流させる技能を磨き、協同の価値を成果として感じる機会となった。それはまさしく協同学習としての効果が十分得られた学修機会となったといえる。

図 5 カンファレンスの様子



メンバーの書いたラベルを読み合わせ、類似したラベルをまとめる（ラベル合わせ・看板付け）



後半になると、学生たちは結論を導き図解を完成させようと身を乗り出して意見交換している

6.2 ラベルワークを活用したカンファレンスの課題

学生の戸惑いの中で《時間管理の難しさ》が一番多くのコード数をもって抽出されたことは、学生は 1 時間でラベル合わせから発表までの工程を行わなければならないため、常に時間配分を考え進行し、緊張感や困惑、焦りがあったと考えられる。ラベルワークの工程に不慣れであるため、もっと時間があれば納得いくまで討論できたのではないかと感じる学生は多かったと推察できる。しかし、すべてのグループは時間制限の中で実施し成果を出していた。これは、実習前の学内オリエンテーションで、ラベルワークを用いた体験が活かされていたと考える。

臨地で行うカンファレンスは時間制限があり、それを延長して行うことには限界がある。より納得いくものを創りたいという学生の思いを尊重しながらも、時間感覚をもち臨む姿勢を支援し育成していくことが求められていると考える。

学生の戸惑いに《ラベル合わせと看板つけ》があった。これは、学生が自分たちの持ち寄った意見を交換し、統合し概念化していく過程において初めての臨地実習ということもあり苦労した部分であると考えられる。建設的な意見交流を実施することや専門的な学修の習熟度が上がれば解決されていくと考える。また、《自分の意見をラベルに表現する難しさ》《自分の意見に対する不安》《わかりやすい図解の表現》に關しても、ラベルワークを繰り返すことで習熟度が上がると考えられる。

《参加態度に問題がある学生への対応》については、教員の介入が必要であると考えられる。司会者は、意見を言わないメンバーにそれを促す役割がある。しかし初めてのカンファレンスで学生はその進行に集中しているため、司会者は気になる学生へ参加を促すことは容易でない。教員は参加姿勢に問題がある学生に気づいた場合は、司会者に参加促進を任せるのではなく、カンファレンスの進行を妨げないよう配慮した上で、該当学生に対して状況の把握と参加を促す関りが求められる。

《わかりやすい発表のしかた》については、カンファレンスの時間調整が円滑でなかったことによりその分、発表する準備時間が圧迫され、どのように伝えるか考えることができないまま発表に至ったグループが多かったことが関連していたと思われる。結論を導くまでに多くの工程を時間内で進行しそれを伝えるためには、伝える順序や内容を精選する必要がある。その準備が整わないまま発表しなければならなくなった発表者の戸惑いは大きく、また、うまく発表できなかったグループはとても悔しい気持ちになったと推察できる。この学生の結果は、発表に対する成果についてもわかりやすく発表したいという意思を学生が示したと考えることができる。臨地で不足を感じていた工程を学内で再度深め成果を発表できる場を設けるなど、発表のニーズを適えるための方法を検討することが必要だと考える。

6.3 基礎看護学実習のカンファレンスでラベルワークを活用する意義

今回、学生が体験した実習は、学生にとって初めての臨地実習であり、緊張感が増す環境であったといえる。その環境においてラベルワークを活用したカンファレンスは、学生の実践的な学修に基づいて自己の見解を明らかにし、仲間との相互関係の中で、伝える、聴く、そして見解の関係性を統合しながら結論を導き出していく学修の過程であった。その体験は明確な成果を生むという充実感を得ており、一つの成功体験として学生の中に位置づいたと考える。

この結果から、今後、学習の中で体験する様々な実習でのカンファレンスにおいて、臆せず自己の見解を明らかにして、仲間との協働的な学びを深めていくことができるという期待を得ることができた。また、以上のことは、対象の個別なニーズに対して最も身近にいる看護職として、チーム医療の中で役割を果たしていくための成長の始まりでもあると考える。

7. 結論

- ① ラベルワークを活用した実習カンファレンスは、学生が個々の意見を前もって熟考し準備し発表する、そして、他の意見を聴き認めること、自分たちの意見を承認し価値あるものとして活用し、統合することで、結論を導く協同学習として効果的であり、学生たちも充実感が得られるものであった。
- ② 充実感が低い項目は、時間内に行うことや成果を分かりやすく発表することに関連したものであった。
- ③ 今後の課題は、カンファレンスの時間制限の中で求めた結論に対して、リフレクションできる機会を作りその結果を発表できる機会を設けることをことで、さらなる学修の深みを増して満足度を高めるようにすることである。

本演題発表に関して、開示すべき利益相反関係のある企業はない。

引用文献

- 1) 厚生労働省. 高等教育局医学教育課. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～
2018年10月31日 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm
- 2) 藤田育子・松本文江・神山幸枝：実習カンファレンスにおける目的達成を左右する因子；学生へのアンケート調査より，日本看護学会収録看護教育，27，p.167-169，1996.
- 3) 村上敦子：臨地実習におけるカンファレンスが学生に与える緊張（2）生理学的変化と日本語版 STAI テスト〔状況不安尺度〕から，東京厚生年金看護専門学校紀要，9（1），p.24-32，2007.
- 4) 濱本由美子：有意義で意味のあるカンファレンスに影響する要因（第2報），大阪医科大学附属看護専門学校紀要，11，p.19-27，2005.
- 5) 鈴木淳子・工藤綾子・大槻裕子：臨床実習中における看護学生が抱える問題とその指導について，順天堂医療短期大学紀要，2，p.17-29，2005.
- 6) 古田桂子・佐野宣子・守田佳夜子：充実した実習カンファレンスの実現を阻む要因 活発な意見交換ができない要因に焦点をあてて，岐阜市民病院年報，32，p.23-27，2012.
- 7) 前掲書 3)，p.10-12.
- 8) 林義樹：ラベルワークで進める参画型教育 学び手の発想を活かすアクティブ・ラーニングの理論・方法・実践，ナカニシヤ出版，2015.
- 9) 前掲書 8)
- 10) 野原大裕：看護学生が認識する充実した実習カンファレンスの様相，神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録，39，p.89-96，2014.
- 11) 高橋恵美子・渡部真紀：小児看護実習カンファレンスにラベルワークを活用しての効果と課題，日本看護学教育学会誌 17 巻学術集会講演集，p.227，2007.

- 12) 井上千晶・石橋照子・飯塚雄一：看護基礎教育におけるラベルワーク技法導入に向けての実践と評価，島根県立看護短期大学紀要，11，p.51-61，2005.
- 13) 前掲書 8)，p.11
- 14) 西村和子・早味妙・松村あゆみ：在宅看護実習まとめの方法に関する検討 ラベルワーク技法の絵による表現の学習効果，日本看護学会論文集 看護教育，40，p.263-265，2009.
- 15) 安永悟：協同学修を理解すればみなアクティブに学べる，看護教育，60（7），p.512，2019.